

発行 : ACL (Aoyama Community Laboratory)

制作 : 青山学院大学 総合文化政策学部 黒石研究室

指導 黒石いづみ教授

学生 三年 阿萬晴香 荒井聖名 工藤麻里奈 黒坂茜

後藤佳菜 小林悠聖 新保美南 染谷麻菜美

中島雪花 西端秀晃 見留奈都美

二年 伊東優介 岩塚知季 遠藤あゆみ 遠藤美紀

木村瑛 小林洋貴 坂田優里 孫レオン 寺田圭孝

豊島誠之 丹羽あきほ 藤盛美紀 細谷真州

山野和仁

HP <http://agu-kuroishi.jp>

発行日 : 2015年1月23日 発行

地域文化資源の学びから 地域おこしへ 山形・気仙沼・青山の広域連携

黒石研究室は気仙沼、山形をフィールドに活動を行ってきました。気仙沼では2011年の震災の支援活動を始めとし、地域の生活、文化の学び、地元の人々との保存活動へ参加してきました。山形では新庄祭りへの準備段階からの参加、中学生とのワークショップを行ってきました。

2014年度
青山学院大学 総合文化政策学部
黒石研究室 活動報告

目次

1. 黒石研究室 活動概要
2. 目次・編集前期
3. 写真展でよみがえる気仙沼鹿折の記憶
4. 気仙沼の「故郷」を守るまつりへの参加
5. 被災地の身障者支援活動参加：特定非営利活動法人ネットワークオレンジ
6. 松岩地区の思いを聞く：オーラルヒストリー保存
7. 気仙沼発のうま味文化調査
8. 青山で行う東北支援：学食プロジェクト
9. 気仙沼に光を：イルミネーション設置ボランティア活動
10. ゆったりとした時間
11. 地域の中学生
12. シンプルライフ
13. ひとつひとつを
14. 守り伝えていく事

編集前期

今年度も皆様には大変お世話になりました。気仙沼、山形ともに、皆様のご厚意のおかげでたくさんの貴重な経験をさせていただくことが出来ました。気仙沼と山形のコラボレーションとして初めての学食販売も叶い、私たちの活動の進展のひとつとして成功した年度となったのではないかと思います。

そのほかにも数々の活動を行いましたので、挨拶代わりに皆様に私たちの活動を知って頂きたいと思い、こちらの冊子を作成するに至りました。写真を中心に構成しておりますので、ぜひご覧になってみてください。（文：工藤）

気仙沼

私たちは今まで震災前の気仙沼の風景や暮らしを調査し、復興に向かう中で、忘れられかけている貴重な文化資源を次世代に残す活動を、多くの地元の方のご協力のもと行ってきました。今年は「失われたもの」というテーマのもと、魚町で津波の傷跡のフロタージュを行いました。また地元の八幡神社にお邪魔し、神主さんに気仙沼の歴史や気仙沼の中での神社の役割を教えていただきました。さらに、今年はイルミネーションの設置のお手伝いやNPO法人ネットワークオレンジさんの子供達との農作業体験、みなとまつりにも参加させていただきました。そして「おいしいで繋がろう」というテーマのもと、学食で東北の料理を販売しました。お祭りや気仙沼の食づくりに関わることで、気仙沼の人々の力強いパワーを感じました。（文：中島・見留）

山形

山形県新庄市ではこれまで地域の自然や歴史、食文化に触れるとともに、近代建築遺産の旧蚕糸試験場の保存活用への提案と協力、夏の新庄祭りへの参加などの活動を行ってきました。今年は、地元の方のご協力のもと、民泊や雪まつりのお手伝い、歴史的文化財の見学、夏の活動では明倫中学校とのワークショップ、新庄祭りへの参加をさせて頂きました。明倫中学校とのワークショップでは、中学3年生と共に「祭りがはじまる街」「まゆの郷プロモーションビデオ制作」の二班に分かれ、様々な方へインタビュー取材を行い、野外調査をしました。新庄祭りでは、例年、上茶屋町のご協力で山車制作のお手伝いをさせて頂き、お祭りを肌で感じることができます。活動をする中で様々な人と関わらせて頂き、また会いにいきたい人が居る場所として新庄が第二の故郷になりました。（文：黒坂）



写真展でよみがえる気仙沼鹿折の記憶



気仙沼駅にポスターをはらせて頂きました



賑わう写真展



人気のあった風景写真



一緒に作って頂きました



お菓子を食べてくつろぐ方々



来場者の方への郷土食

今年の5月5日佐々木徳郎さんの奥様のお父様が撮られた写真を展示し、“昭和鹿折の写真展”を開催した。会場を貸して下さった渡辺無線さん、来場の方へのお菓子作りに緒方民子さん阿部貞子さんのご協力を得られたことで無事開催が出来た。来場された方々には、様々なお話を聞き、ポストイットに書き留めた。震災を経て、昔の気仙沼の姿について語り合える場所は減ってしまったと感じた。しかし、今回の写真展は、そうした場となつたのではない。また、昭和初期という、途方もなく昔の故郷の姿を、現在でも綺麗に見られる写真といふ媒体に改めて驚いた。ぜひ、多くの方に写真を通して当時の姿を知って頂きたい。そして、その写真の背景の知識共有・集積・記録を行う場をより積極的に設けるべきだと感じた。（文・小林）

気仙沼の「故郷」を守るまつりへの参加



子供たちの笑顔



響き渡る太鼓の音



たくさんの人で賑わう田中通り



笑顔で踊るはまらいんや



元気に担ぐ御神輿



気仙沼湾に浮かぶ花火

みなと祭りになるとおみこしの掛け声や、太鼓の音、そして屋台を楽しむ人々の笑い声が響き渡り、東京とは違った活気と賑やかさで溢れる。震災前より規模が小さくなつたとはいえ、気仙沼に住む人々も県外に出て行つた人々も、祭りになると皆会場に集結することから、故郷を愛する気持ちと長年続々伝統的な祭りを守り続けようという熱い想いを感じた。はまらいんやおどりでは、沿道から見ている住民やお年寄りの方々も歌を口ずさみ楽しそうに手を叩き、観客と踊り手が一つになつて盛り上がる。この光景は、気仙沼の人々が気さくで温かい人柄だからこそみれる光景であり、東京の祭りでは決して見られない。さらには、「久しぶりですね！」と人々が言い合う瞬間も垣間見え、祭りは震災前に近所どうしだつた人との再会の場であることが分かつた。（文・見留）

被災地の身障者支援活動参加 特定非営利活動法人ネットワークオレンジ



プチトマトを収穫



震災時に作られた恐竜の貼り絵



無農薬で育ったプチトマト



施設に飾られた作品たち



広大なオレンジファーム



農作業後の集合写真

オレンジファームの農作業体験。広大な畑を無農薬で管理しながら、常に子ども達の状態を気にかけ作業をするスタッフの方々の大変さと食育活動への熱意を感じた。コンビニ等で食べたいものを簡単に購入していた自分にとって、“持っているもので生きていく”姿はとても力強く映つた。そして、食のありがたみを感じた。気仙沼の大自然のなかでミネラルたっぷりの土をいじり、日々成長していく野菜や雑草との触れ合いから子ども達が学ぶことは、単に農作業の知識だけではないだろう。また、彼らの魅力的なアート作品を鑑賞することも訪問する際の一つの楽しみである。障がいの有無に関わらず、一人一人の魅力や強みを共有しながら生きていくことができる社会について考えるようになった。(文・染谷)

オレンジファームの農作業体験。広大な畑

松岩地区の思いを聞く：オーラルヒストリー保存



漁業組合聞き取りの様子



煙雲館集合写真



漁業組合集合写真



海の様子



船の様子



八幡神社集合写真

5月の合宿で松岩地区の地区計画についてお話を伺った。そこで八幡神社と煙雲館、尾崎神社の関係について調べるため夏の合宿では、松岩の文化、歴史背景の理解のために煙雲館、八幡神社、漁業協同組合の三か所にお話を伺った。海によってコミュニケーションが破壊されたが、それでも地域の愛と熱い思いを肌で感じることができた。松岩地区は現在居住禁止区域に指定されているが、それでもなお失われていない伝統や文化を学べた。気仙沼に暮らす人々が大切にしてきた歴史に触れ、地域が培ってきた思いを感じることができた。3か所の聞き取りを行って、共通していたことは皆地域の歴史に詳しいことである。地域の歴史を皆が共有しており、地元の人が松岩に根付いていることに気づかされた。

(文・遠藤)

気仙沼発のうまい文化調査



カツオ節をその場で削っていただいた



社長さんのお話



削られる前の節



文化かまど



種類豊富な節



さまざまな大きさがある

日本の重要な文化である和食を支えているのは日本のうまい味だ。しかし、勝正商店さんでお話を伺った際、小学生の息子さんでもインスタントのダシと、カツオ節からとったダシの違いがわかるとおっしゃっていた。また長年インスタントのダシを使っていた旦那さんは、結婚し勝正商店で働くようになつてからインスタントのものは食べられなくなつたそうだ。また、めんつゆという調味料が普及し、どの家でも同じ味の料理が出されるようになつたといふ話を聞いた。私たちは料理の手間を省くとともに、本物のダシを食べる機会を失いつつあるということに気付いた。漁業の後継者が少なくなつていて、カツオ節を作る職人さんも後継者が少なく、またカツオ節の需要も減つてきているそうだ。世界遺産ともいえる日本のうまい味が失われてしまうのはとても惜しいことだ。手間を惜しまないことの大切さについて考えさせられた。（文・藤盛）

日本は日本のうまい味だ。しかし、勝正商店さんでお話を伺った際、小学生の息子さんでもインスタントのダシと、カツオ節からとったダシの違いがわかるとおっしゃっていた。また長年インスタントのダシを使っていた旦那さんは、結婚し勝正商店で働くようになつてからインスタントのものは食べられなくなつたそうだ。また、めんつゆという調味料が普及し、どの家でも同じ味の料理が出されるようになつたといふ話を聞いた。私たちは料理の手間を省くとともに、本物のダシを食べる機会を失いつつあるということに気付いた。漁業の後継者が少なくなつていて、カツオ節を作る職人さんも後継者が少なく、またカ

青山で行う東北支援：学食プロジェクト

東北っ！うまいにや～御膳



学食のディスプレイに表示した広告



実際に生徒が食べている様子



まける米 田植えの様子



「東北っ！うまいにや～御膳」



実際に生徒が食べている様子



学校に貼ったポスター

「おいしいで繋がろう」というテーマで行った今回の学食プロジェクト。山形の新庄市からは納豆汁とまける米、気仙沼からは氣仙沼ホルモンと東北の知恵や想いが詰まったメニューをたくさんの方のご協力のもと販売した。販売期間内に学食内でうまいにや～御膳を食べていてる学生にインタビューをすると、どの学生も「美味しいです」と言つてくれたことが青山の学生と東北が“食で繋がる”と感じることができた何より嬉しい瞬間だった。また、学食プロジェクトを通して仕入れや販売の仕組みを学ぶだけでなく、食という媒体を用いることで、おいしい”という体験を経て、より心に響く伝え方ができるようになるということを感じ「食の可能性」ということについても感じることができた。

（文・中島）

気仙沼に光を：イルミネーション設置ボランティア活動



仮点灯の様子



内湾の様子



設置作業の様子



現地の方々との集合写真



電球取り付け作業の様子



運び込み作業の様子

私は二〇一四年一一月一四日から一六日にかけて、気仙沼内湾イルミネーション設置ボランティアに原宿表参道櫻会の鬼雄次郎様のご協力のもと、連携させていただき作業に参加した。主催のOne-Lineの方々やBLOWER代表プロデューサーの吉木崇様を中心に地元の方々、遠方からボランティアに来られた方々と協力し電球を取り付け、運び込み、設置の作業を行った。三日間を通じて、震災で今までのような光を失つてしまつた気仙沼に、ボランティアという形ではあるがイルミネーション設置の準備に参加した。ひとりでも多くの人が気仙沼の地に足を運んで、立ち止まっておひう機会を作り出す手伝いができる」とはとても良い経験となつた。また、作業をしている中で、気仙沼が少しでも今までのような活気を取り戻せるよう努力する人々の熱意も感じ取ることができた。今後もこのようなプロジェクトには積極的に参加していきたい。（文・山野）

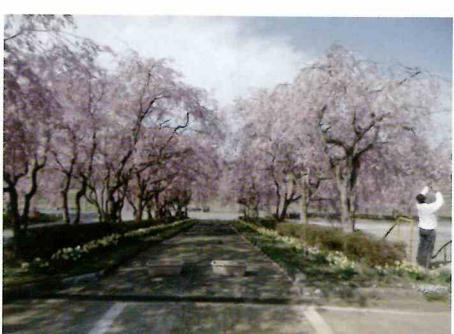
ゆったりとした時間



最上川にある松尾芭蕉乗船の地



ソリのアトラクション(雪まつりにて)



春に見られる桜並木



鳥越八幡宮にある大木



民泊で泊まさせて頂いた森さん家にて



鳥越八幡宮の入り口

ゆったりとした時間とはゆとりを持つて過ごす時間の事である。去年私達は新庄の雪まつりの手伝いをした。そこでは売店やアトラクションが設けられ、主に私達はアトラクションスタッフとしての参加であった。人懐っこい性格の人が多いからか沢山の人と会話を楽しむ事ができ、普段の日常とは違うゆとりある時間を過ごせた。また民泊では、地元の方と密接に話す機会となり、新庄の暮らしや食について多くの時間を使いながら会話をし、知ることになった。会話を楽しむ事でとても時間がゆっくりと感じられた。他にも鳥越八幡宮を訪れた際、その歴史を聞く事によって思いとどまりながら建物や景色を見る事ができた。新庄にはそのような場所、自然そして人が存在し、その度に思いふけ、ゆとりある時間を過ごしました。（文：阿萬）

地域の中学生と共に学ぶ地域文化



八鍬さんの畑にて収穫体験



市長さんへのインタビューは中学生には貴重な体験



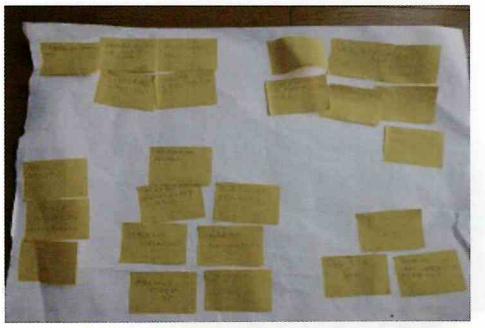
中学生の意見を一言ずつ集める



普段は入れない山車小屋への見学



参加者全員で記念撮影



中学生の意見を見やすくまとめしていく

普段生活しているだけでは気づきにくい点にも気づけた。また、ディスカッションの時間を設けることで、一人一人が新庄祭りに対して特別な想いを抱いていることや、この3日間で改めて理解が深まることなど、中学生の実直な意見を聞くことができた。3日間のワークショップで得た情報を「新庄祭マップ」として、中学生自身によりまとめてもらつた。

(文・小林)

シンプルライフ



東京では見かけることのない納豆汁



納豆とお餅を絡めた納豆餅



樋口さんの家に民泊させていただいた時の夕食



一つの鍋から麺をすくって食べるひっぱりうどん



吉野さんの家に民泊させていただいたときの夕食



高橋さんから無農薬のお米「まるける米」の説明

シンプルライフとは、直訳すると、簡素で質素な生活のことです。しかし、この言葉には、一言で定義しきれないような生き方までが含まれているのではないでしょうか。新庄では、一つ一つのものに愛着を持ち、モノと出会った時の物語を話していく「家族」に出会いました。簡素、質素と聞くと、何か寂しい思いを抱きますが、シンプルライフは決して寂しいものではありません。シンプルライフとは、モノの量に固執する」となく、必要なものに出会えたことへの感謝の思いをもつていくことが大切なことなのではないかと思わされました。春の民泊では、冬を越せたことに感謝しながら食べる郷土料理、ひっぱりうどんをいただきました。(文・荒井)

ひとつひとつを丁寧に



戸澤神社の宮司さんへのインタビュー



演奏する囃子連盟の斎藤さん



新庄市長へのインタビュー



山車連盟の川崎さんへのインタビュー



物産館ゆめりあで働く津藤さんへのインタビュー



上茶屋長若連の若頭

その中で、新庄まつりは「時と場所を超えてつながる心のふるさと」というお言葉が得られた。そのことからも、祭が地域や人々のこころの拠り所となつていいことが改めて分かった。また、中学生の中には将来も祭に参加したい、新庄にいたい、と語ってくれる子もいた。熱心に活動する大人たちのエネルギーは内部完結せずに地域波及していくことが、インタビューにより見えてきたようであつた。（文：工藤）

新庄祭に熱い想いをかけている方はたくさんいらっしゃる。今回は8月のワーキングショップの中で神社の宮司さん、山車、囃子連盟の方、市長さん、物産館の方、山車作りの若頭にインタビューをした。

それぞれの立場からの祭への想いや、今後子供たちに託したい想い、また伝統文化としての新庄まつりを今後どのように伝えていくのかなどお話を聞くことができた。

守り伝えていくこと



講演を行う高橋保広さん



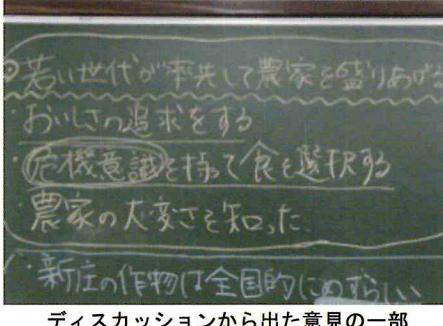
エコロジーガーデンにて講演して頂いている様子



息子の広一さんに田んぼを案内して頂いた



中学生とのディスカッションの様子



ディスカッションから出た意見の一部



参加してくれた明倫中学校の学生

8月、中学生とのワークショップの中で無農薬のお米作りを中心に行っている農家の高橋保広さんのお話を伺った。高橋さんは山形県の在来種「さわのはな」を無農薬・無化学肥料で育てている。栄養たっぷりの“味”わいある稻を作るためには、土が重要であると高橋さんは言う。稻は“土”からミネラル分などの栄養を吸収し、力いっぱい育つのだ。その土から栄養を吸い上げるのは“根っこ”であるため、十分に根っこが育たない遺伝子組み換え植物は、お腹は満たされるかもしれないが、栄養は体には届かない。高橋さんは遺伝子組み換えの怖さや健康に豊かに生きていくことを伝えている。講演を聞き、農家で育つたという中学生は、「次世代である自分たちが農家を盛り上げていくことが大切だ」と心強い感想を聞くことが出来た。（文：黒坂）